

史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇〇〇年 第二四号



伊能忠敬研究会

表紙図解説 本穀谷稲成神社蔵 日本地理測量之図(部分)

津和野市の太鼓谷稲成神社に、津和野藩から幕府天文方に
出向していた津和野藩士堀田仁助が、帰国土産として藩主亀井
侯に献呈した本図が所蔵されている。

堀田仁助は暦数に長じ寛政五年から暦局に出仕し、文政一
〇年まで約三〇年間暦局に勤務した。伊能忠敬が測量を開始
する前年に、海路で蝦夷地測量を実施している。

日本地理測量之図は縮尺を伊能小図の二分の一の 864,000
分の一とし、日本全体を一枚に描いたものである。最初の版は
高橋景保が忠敬の九州測量以前に、幕府の要請で他の資料によ
つてとりまとめたもので、日本輿地図稿という名がつけられた。
伊能測量完結後修正して日本地理測量之図という名前がつけ
られた。明治初年に日本全図として刊行された図の多くは本図
が基礎となっている。

五メートル四方くらいの巨大な日本図で、地図の周辺に里程
表、山岳一覧、島嶼一覧などを配し、日本総覧のような形式
をとっている。なぜか縮尺二分の一の日本東半部沿海地図とセ
ットで保存されていることが多い。

ここに掲げたのは江戸を中心とした部分で、測線に沿って地
名を記し、宿駅に○、城下に□を描き、測線の及んでいない地名
を●で示している。点線は国の境である。中央に入間山などと
いう地名が見える。(渡辺)

(題字は忠敬の自筆)

目次

(表紙写真解説) 目次

エッセイ

NHKお正月時代劇

「四千万歩の男―伊能忠敬」について

坂部さんの手紙

研究ノート(連載)

伊能忠敬の房総沿岸測量(二)

伊能古文書教室6 佐原邑河岸一件(二)

伊能忠敬宛江川英毅書状と伊豆測量(三)

作品紹介

「蝦夷地測量図」

報告「伊能忠敬と九州展」おわる

地域史料紹介

伊能忠敬の江戸在住日記(四)

お知らせ

入会案内ほか 裏表紙裏

(裏表紙 英文目次)

注 今回は、連載の対馬藩宗家文書『測量御用記録』を
お休みします。次回に掲載します。

渡辺 一郎	一
伊能 陽子	一二
渡辺 孝雄	六
小島 一仁	一五
仲田 正之	二〇
浅井 京子	二五
編集部	二六
佐久間達夫	二七
編集部	

お正月時代劇「四千万歩の男―伊能忠敬」について

付 松平定信と伊能忠敬

渡辺 一郎

台本を整理する

NHK総合テレビで、二二世紀初頭の正月三日「正月時代劇(二時間番組)」で伊能忠敬(主演・橋爪 功)をとりあげることは皆さんご承知のとおりです。監修を依頼され台本のチェックから、測量、天測、地図作りの場面構成、セリフ、そして撮影現場の立会いまで約二〇日間お付き合いしましたので感想などを述べてみたいと思います。

お話しがあつたのは八月でした。大変結構なことなので、協力することにして色々意見をチーフ・プロデューサーに提案しました。ところが、台本が出来上がってびっくり。提案は無視され、「四千万歩の男」の面白そうなフィクション部分の物語が、これでもかこれでもかと入っていました。

ほんとうは、そういう「作り話」は一切落としたいのですが、視聴率を稼がなければならない制作者の立場ではそうはいきません。「時代劇のドラマであつて教養番組ではないんですよ。お正月なので楽しくやりたい」と前もっていわれていましたが、正直にいつてがっかりしました。

しかし、確かに教養的な内容ばかりでは、関心ある人は別として、多数の人々を二時間も引きつけておくのは難しいでしょう。気を取り直して、フィクションの量を減らす交渉をし、史実部分の脚色は我慢できる程度までに直し、測量、天測、地図作り場面はできるだけ真実

に近づける方針で、真つ赤になるほど手をいれました。

つぎは女性です。女主人公を画面で活躍させないとドラマにはなりません。「今年の大河ドラマはやり過ぎだ」と局では笑っていましたが、そうになると、候補者は第一の妻ミチ、謎の才媛で内妻のお栄と、長女お稲の三人に限られます。「四千万歩の男」の舞台は第二次測量の半ばまでなので、お稲さんは無理。俳優座の「伊能忠敬物語」では女主人公はミチでしたから、ここは、お栄さん(高島礼子)しかないでしょう。台本ではこれでもかこれでもかと登場します。

地味な地味な忠敬の人生のなかで、ただ一度、艶やかな女性と客分という名目で同棲し「才色兼備の麗人」と高橋至時をうらやましながら、第一次測量のあとで忽然と記録から姿を消します。

伊能忠敬研究会では、四人目の妻で内妻と敬意を表していますが、史実的には殆ど不明ですから、ドラマでは作者の腕の振るいどころで大活躍します。やり過ぎかも知れませんが、忠敬人氣に彩りを添える意味でいいだろうと我慢しました。

原作は吉原の「おいらん」の出ということでしたが、あまりひどいので辰巳芸者ということにしました。芸者ですから吉原にも出入りして高橋至時と忠敬を案内するという、とんでもない場面を描きます。

天測では、豪華番組なので忠敬隠宅の観測所をしつかり作って貰おうと考えました。忠敬伝記では、よく物干し場で星を見ている絵が描かれますが、これは全くの絵空事です。忠敬が持っていた観測器具は大谷亮吉『伊能忠敬』に寸法入りで詳しく紹介されていますが、物干し場などには乗らない大型観測器です。特に圭表儀という太陽の日影を測る機器は長さ二丈七尺、高さ一丈三尺もありました。とうぜん観測所は地面の上ということになります。

ところが、地上の観測所では話の筋をすっかり入れ替えなければな

らないので勘弁してくださいよ、ということになって結局物干台に戻りました。そのかわり中象限儀は実物どおり、圭表儀は寸法を縮めてもいいから、同じ形にお願いして実現しました。それでも子午線儀は無理でした。忠敬が測量に出かけるために測器に払った費用七〇両。いまのお金にして一千万くらいと思いますが、制作費一億を超えるNHKの大型時代劇で、形だけ同じ機器を作るのが大変だということです。妙なところで忠敬の執念に感じ入りました。

それからお稲さん。伊能測量のもう一人の女主人公お稲さんは後半の測量を支えた重要人物ですが、第一次測量では出番がありません。残念なのでいちおう、登場だけさせることにしました。江戸店を任せられていた夫の盛右衛門が米相場に失敗して許しを乞う。しかし、忠敬は許さない。離縁する。お稲は追いかけて家を出る。稲も勘当される。という筋でセリフも考えました。

しかし、ドラマとしては、そのあと落着させる場所が必要です。しかたがないので、第一次測量帰着の場面に子供連れで出迎えて詫言を入れ、忠敬も後悔して許すという筋書きで妥協しました。

事前の打ち合わせでは、せめて将軍上覧の場まではやりましょう、ということにしていたましたが、江戸城大広間の再現に、予算がかかり過ぎるということでこれも落ちてしまいました。しかし、最終版伊能図はぜひ映してもらおうと思い、時代は合いませんが、第一次測量のメンバーが覗き込み、やがて現代図に重なるという筋になっています。

そのほか、あれやこれや、つぎのようなお願いをしました。

伊能測量の立役者・堀田摂津守が悪役になっていたの、セリフを大分直しました。はじめの方に悪役の感じが残っていますがハッピーエンドになるので我慢して下さい。

脚本家が古い忠敬の本を読んだのか、忠敬は伊能家に奉公していて

婿に直ったような筋書きになっていたの、とんでもないと直ししましたが、ミチの悪妻振りが少し残りました。

劇中の登場人物で有名な人は松平定信（片岡仁左衛門、襲名後始めてのテレビ出演）です。この人も忠敬と同じで小説や映画になりにくい、真面目人間ですが、井上ひさしさんは小説家ですから、推測をふくらませて、どんどん活躍させています。

定信が吉原に火をつける話しが出るのです。トイレで忠敬が定信の秘密を立ち聞きし、お柴の計らいで取引しましたが、付け狙われます。

時代考証の竹内さん（江戸東京博物館館長）によると、実際にこの頃吉原で火事があった。火付けは大罪だが吉原は特別扱いだということです。それでも火付けはひどいから、黙認くらいにトーンを下げました。定信が忠敬と出逢うなど、正式な場ではあり得ませんが、吉原なら、あり得ないだろうとそのままだしました。

少年時代、九十九里で捨て子扱いにされていたという話があったの、寺子屋に通わせてもらっている形に改めました。

橋爪 功さん

橋爪さんから希望があつて、ロケ地の下見の合間に、仕事で京都滞在中の橋爪さんに逢つて忠敬のお話をしました。「ちくま新書」の拙著を渡して忠敬の概略と、測量のやり方を説明しましたが、たいへん御熱心で理系の質問を多くいただきました。梵天の垂直はどのようにして確認するのか。三角定規でも持っていたのではないか。杖先羅針を立てる位置と梵天の位置の関係はどうなる。など測量作業を演ずる立場での疑問点をいくつも指摘されました。

撮影現場でも、坂道の勾配を測るとき、小象限儀の見通し線は梵天のどこを狙うのかといわれました。厳密には目の位置と等高の標的を

立てねばならないのですが、大谷氏は「簡略して相手の目を目標にしたらしい」といつているし、第一次測量では途中を急いでいたから、梵天持ちの目を狙っていたでしょう。といった具合である。

気安くて、理解が早い人ですが、測量隊の俳優陣とも冗談をいいながら、よくまとめて本物の忠敬さんもこんな人だったかな、という感じがしました。加藤忠敬も良かったが、橋爪忠敬もなかなかのものだという感じです。

ロケ先で

ロケは福山の「みろくの里」と「松竹京都」および丹後半島の「間人(たいざ)海岸」で行われました。まず下見で、筆者も、監督、カメラマン、美術、照明、など十数人のスタッフと同行しました。現場で構図、設備などを決めてゆきます。

ロケ前日、ホテルにチェックイン。現場の準備状況を確認した上、ホテルで俳優に測量器具の説明。穴戸(隼太役)さんに象限儀を動かしてもらい、大体の所作をきめました。

圭表儀はもう少し大きい物を期待していましたが、物干し式観測場・推歩楼に乗せるため、五分の一になってしまいました。しかし、象限儀は大谷本の図面どおりに原寸のものが出来ました。分解したとしても、こんな大きな物がよく馬の背で運べたと感心しています。

圭表儀を扱うのは橋爪さんなので、設置方法、動き、日影をどう写す、など理系のやりとりがありました。

ロケ当日は、俳優さんは支度があるから先発。本隊のマイクロボスで現地に着くと、江戸の町ができていました。下見のとき、これで撮影ができるのかと思った雑然とした廃屋の町に、千住の木戸が立ち、家々に暖簾が下げられ、日除けが出て、水桶、大八車、米俵、屋台が置かれ、エキストラの武士、人足、和服の女、子供が歩き回り町にな

っていました。

一角には吉原の格子付きの遊郭が半分くらいできかかっており、提灯など吊るしていました。翌日には吉原の大門まで完成して驚きました。これら作業のため道具、小道具の作業車、電源車、録画車、要員車など十数台がならび、食事ができるテントの軽食堂もできて人口百二十人の町になっていました。

坂道の勾配測定では、お捨が何故そんなことをしているのだと邪魔にはいり、忠敬が一応説明しますが、しきれなくなつて、お栄！と呼び、学者・お栄が説明を始めます。

岩場の測量では、長助と吉助が攀じ登つて梵天を立てる、忠敬が方位を測る、秀蔵が間縄を伸ばす場面をおさめました。嵐のあとの日本海の大波がバックになって迫力あるシーンとなりました。

大雨をついての測量はやっていないといったら、強風下の測量場面を作ることになりました。大型送風機で篠をゆすり、ヘリコプタで風を起こし、砂塵のかわりにコーンスターチを、ばさばさ撒いて風塵をつくり、橋爪忠敬と穴戸隼太は強風をついて歩測をしました。

まだまだ、ロケは続き、スタジオ撮影もありますが、あとはテレビを御覧下さい。視聴率目標一五%です。大いに宣伝をしていただくようお願いいたします。

松平定信と伊能測量

伊能測量を支えた重要人物は高橋至時のほかに幕府若年寄・堀田攝津守と仙台藩医・桑原隆朝がいることは、研究会員なら安藤由紀子氏の記事などでおなじみであるが、一般の人達には分かりません。

松平定信、堀田攝津守、桑原隆朝と忠敬の全国測量が、何らかの形でつながっていることは容易に想像が付くのですが、史料で説明しろ

といわれるとなかなか困難です。状況証拠はあるのですが、直接証拠が見当たらないのです。井上ひさしは作家だから、直感で自由に定信を登場させていますが、どうしたらよいのかを迷いました。

はじめは定信を取り上げないこととし、堀田攝津守以下で構成したらと考えたのですが、何しろ堀田攝津守では普通の人には偉さが分かります。それに対し松平定信は歴史の本には必ず出てくる著名人です。攝津守のバックに、老中を辞任したとはいえ、井伊家などと同格の溜の間詰で、老中評議にも出席を許されている松平定信がいたということは、伊能測量が徹底して行われた説明としてはまことに分かりやすい。測量当時の老中首座は、定信が登用した腹心の松平伊豆守信明でした。方向性は違っていないし、ドラマですから、史料的説明はあとからにして御登場を願った次第です。定信役には片岡仁左衛門さんという大物歌舞伎役者が出演して全体を引き立ててくれました。

本当に松平定信が伊能測量にどのくらい、からんでいたかは大きく興味が持たれます。調査中ですが、分かったことだけを書きます。

一、定信は世子の頃から親しく人材を求めて交わっていた。戸田氏教、堀田正敦（摂津守）は、そのメンバーである。

一、定信には文才があり、老中辞職後、文事の会を主催し各界の名士と交流した。諸侯では堀田正敦、松浦清（平戸藩主）などが参加していた。終始定信の身边にいたのは谷文兆で、伊豆沿岸巡視でも連れて歩き、鶴岡八幡宮で宝物を写させている。（白河樂翁公とその時代「三上参次、創元社、日本文化名著選 昭和15」）

一、定信の退職は円満退職であった。徳川一五代史には「政治向きのこと、大小となく、定信在職の時のごとく執り行ふべき旨、諸役人に命を伝う」とある。（近世日本国民史 徳富蘇峰）

一、堀田正敦は仙台藩主伊達宗村の八男であるが、部屋住みのころ、旗本でもよいから出仕したいと願っていた。定信の世話で、近江の堅田藩一万石の養子になり、襲封したのち、寛政二年五月、若年寄となり天保四年まで若年寄を勤めた。（江戸時代史6 三上参次 講談社学術文庫本 昭和52）。

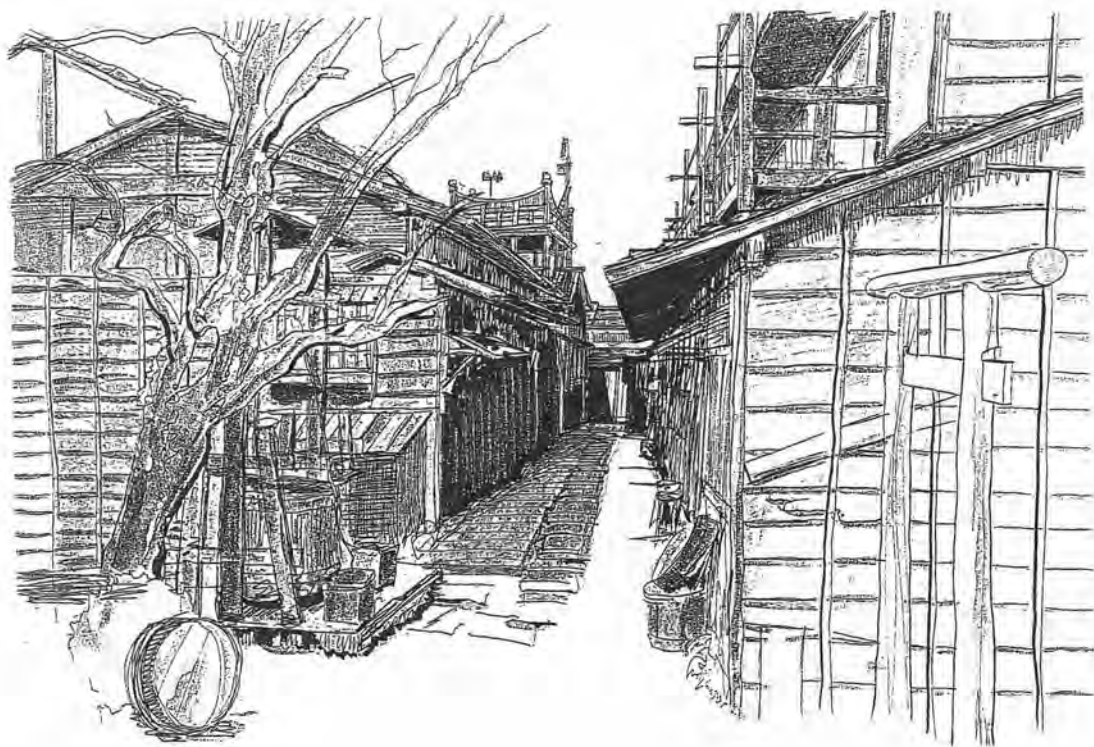
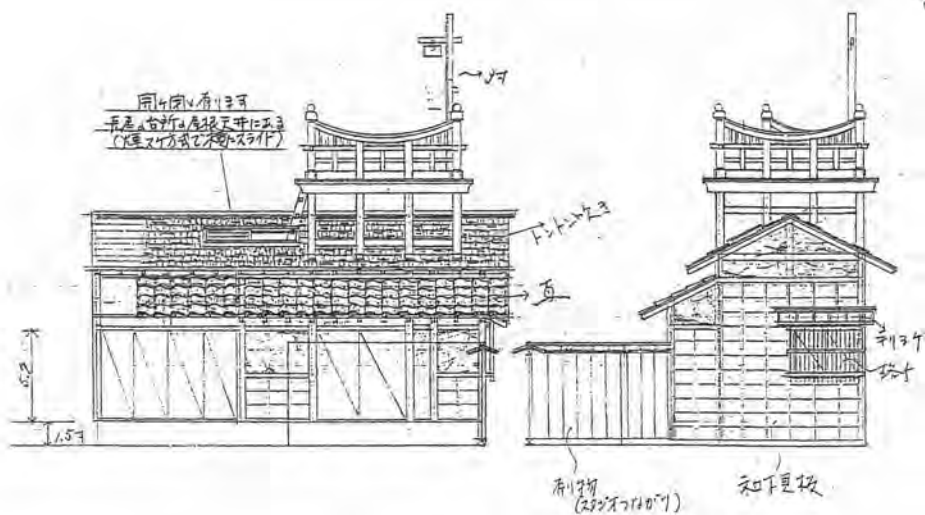
正敦は襲封するとすぐ大番頭に召し出されます。大番頭は一万石位の大名役ですが正敦の大番頭は好評でした。（よしの草紙）この役を一年間勤めると若年寄に拔擢され、以後四三年間、老衰で致仕するまで若年寄を勤めます。定信の影響が大きい間は、強力な引き立てがあったに違いありません。定信は白河藩主のうちから人材を求めて交流しており、その中に伊能測量の先触れ発令者として名前が出てくる牧野備前守、戸田采女正、松平伊豆守信明がいました。

定信が老中首座に就任し將軍補佐役となると、彼等はつぎつぎに閣僚に任命されます。定信失脚後は、老中首座を三河吉田藩主・松平信明が引き継ぎ、約一五年間政務を見ます。閣僚はすべて引き継がれ、腹心の松平信明が老中首座ですから、すべての政治情報は定信に入っていたとみてよいでしょう。

一、將軍吉宗が企画して果たせなかった改暦を定信が実施しようとした。寛政の改暦は定信の発意である。（日本の天文学 中山茂 二〇〇〇、六、一、朝日文庫）（日本歴史大系3近世 五四七頁 厚谷 山川出版 一九八八）

そうすると、高橋至時を呼び出したのも実質的には松平定信の指示ということになり、伊能測量との因縁はさらに深まります。

忠敬は黒江町の幸七店に住んでいたという。先方に推歩楼が見える。
ロケ場所の一つ、松竹京都撮影所に設けられた忠敬隠宅の天文台・
推歩楼の図面と外観のスケッチです。撮影が終われば取り壊されます
が、普通の家を建てるのと同じように図面を書いて、大工さんの手で
つくられました。



伊能忠敬の房総沿岸測量(二)

渡辺 孝雄

第三日 検見川から五井まで(千葉市・市原市)

六月二十一日 この日は晴天で、明け六つ半前(午前七時前)

に検見川の宿を出発している。稲毛村(二六四軒) 黒砂村(二五軒) 登戸(一五〇軒) 寒川村(三七五軒、駅場、名主市左衛門)を通り、都川を渡っているが、伊能中図をみると、測量隊の道筋は河口を渡ったのではなく、少し上流に迂回して橋を渡ったらしい。江戸中期の延享年間の記録によるとこの板橋は長さ十四間・幅二間と記されている。

千葉村新田・後田方入合(二二〇軒余) 今井村(六八軒)

泉水村(六六軒、駅場) 曾我野村(六四〇軒余、駅場) 生實新田

(二〇〇軒余) 濱野村(本行寺門前三六軒、御朱印一〇石) 村田

村(八一軒) 国界(上総国市原郡に入る) 八幡村(三八二軒・一

五・三人、駅場、一五〇石八幡宮領、市原市)。伊能中図では八幡村

に神社の印があり、八幡神社の所在を示している。(写真1) 五所村

(九五軒・四五〇人) 金杉濱村(二軒) 君塚村(六八軒)を経て、

五井村(六四〇軒、有馬備後守陣屋あり)に八つ頃(午後二時頃)に

到着した。名主の甚五左衛門宅に宿泊している。この日の検見川村か

ら五井村までの測量距離は、五里二町三八間(一九七八七・一六分)

である。夜間雲間のなかで天体観測を行い、三十五度三〇分三〇秒で

あった。

幕末の慶応四年閏四月に、官軍と戦うために房総に逃れて来た幕府軍の一隊は、この中島甚五左衛門家に一時本陣を置いている。前の五

井小学校は、名主の甚五左衛門屋敷跡に建てられたという。区画整理により、今は商店街となっているが、その地は「内房線の五井駅に間近い。

八幡宿より内陸に約四キロほど入った所に、久々津(市原市)という地区がある。その板倉清一家に、伊能忠敬の書という額が伝えられている。(写真2)「勤儉慈恵」とあり、脇に「為板倉君 東河」とある。東河は忠敬の号である。板倉家の先祖が名主をしていた時に忠敬が泊まり、街道の測量の案内をし、その礼としてこの書を貰ったという。(「上総市原」第七号一四四頁) 忠敬の書については、日記など細かい文字以外に余り知識がないため、この書の真偽については何ともいえない。しかし、「勤儉慈恵」という語句はいかにも忠敬らしいものである。

第四日 五井から木更津まで(市原市・木更津市)

六月二十二日 朝より晴れ、六つ半後(午前七時過)に宿を出発している。忠敬は五井村について「五井村ハ海へ遠し」と記している。

五井村の村明細帳には「居村から浦迄の道のり十町程」とあり、海までは約一キロほど離れていた。岩崎新田(七五軒) 玉前新田(一三〇軒) 松ヶ島村(五五軒) 青柳村(一八四軒) 今津朝山村 姉

崎村(四〇一軒 名主新兵衛・五郎兵衛) 椎津村(二六〇軒)(上

総国望陀郡に入る) 代宿村(六四軒、袖ヶ浦市) 久保田村(一二

〇軒) 蔵波村(一六八軒) 奈良輪村(一二二軒) 牛込村(八〇

軒、木更津市)を経て、七つ頃(午後四時頃)に中島村(二七二軒、

木更津市)に到着した。宿は名主の惣七郎宅であった。この日の宿泊

予定地は木更津町であったが、測量が予定通りに進まず、きゆうきよ

触れを出して中島村泊まりになったのである。なお牛込村と中島村の

境で富士山の方位を測っている。この日の五井村から中島村までの測

量距離は、五里八町五間(二〇三八・一丁)であった。夜間は晴れており、夜間の天体観測の結果は、三五度二五分三〇秒であった。名

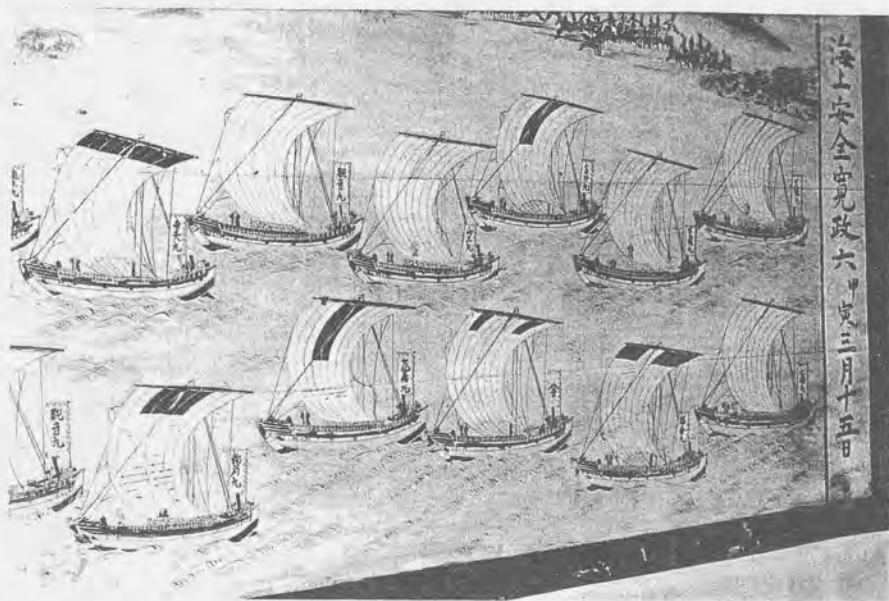


写真1 八幡浦の五大力船の絵馬 (寛政6年奉納 飯香岡八幡宮蔵)

主の金網惣七郎家は、当時は来迎寺の門前近くにあったという。明治年間に 金網家は、木更津市菅生に移転した。

第五日 中島から木更津まで(木更津市)

六月二十三日 六時半前(午前七時前)に宿を出発している。この日は朝より晴れており、久津間新田(八一軒) 久津間村(六五軒) 江川村(七六軒) 中里村(三五軒) 吾妻村(二四〇軒)と測り、九つ前(正午前)に木更津町(九四三軒、名主は八左衛門・善五郎・治左衛門、木更津市)に着いた。

この日の中島村から木更津までの測量距離は、二里一町五十八間(八〇一四・五六丁)であった。夜間の天体観測では、三五度二三分三〇

秒であった。

なお伊能中図には木更津から富士山への方位線が記入されており、木更津からの方位確認を行っている。

当時木更津湊は、五大力船・押送船による江戸への物資輸送の港であり、木更津と江戸日本橋の木更津河岸の間は、木更津船とよばれた定期船が運行され、西上総の交通の拠点として賑わっていた。

忠敬一行は、木更津の名主八左衛門宅に宿泊している。名主の石川八左衛門家は、元禄年間も名主役を勤め、寛政年間以降明治初めまで五大力船の船持でもあった。文政八年(一八二五)に八奴八幡神社に奉納された狛犬の台座銘にもその名前が



写真2 板倉家に伝わる「勤儉慈恵」の書
(縦 32.5cm 横 135cm)

ある。雨十の号で俳諧もたしなみ一茶との交流もあり、一茶は木更津にくると、八左衛門家に泊まっている。家のあった場所は、現在の木更津郵便局の地であった。

この日の二十三日付けで、忠敬は師の高橋至時宛てに手紙を出したらしい。七月二日付けの至時の返書が、伊能忠敬記念館に残っている。一部を要約してみる。

先月二十三日付けの手紙は、二十七日に手元に届きました。炎暑の中お元氣とのこと何よりのことです。測量の距離が予想より伸びているとのこと、又中川から先は薄の原や小竹で測量が手間取っているとのこと、困難を察いたします。仕方なく行徳泊まりとなった由、御手紙によっても難渋をお察します。

量程車は、土地の乾き具合により違いが出る由、もつともなことです。こちらで引き試しても、土地が堅い所と、塵芥などごみが多い所では必ず距離が違います。そのため間棹や間縄も用いて比べて測っている由、この点は時々試してみる必要があります。測量は大変な仕事です。定まった場所での測量で安心して使用している器具でも、時々点検しなくてはなりません、一日に数里を移動し、乾湿・天候がかわりますので、注意して測量する必要があります。特に今回は一度の里数を精密に測る必要があり、大切な測量です。後世になってもその数値が翻ることのないようになることを願っています。各地の大きな山を測量しているとのこと、そのお心掛けにて最上の地図が出来ると思っています。

(後略)※

忠敬の房総測量苦勞に対する労いととも、忠敬の測量の方法につ

いてのアドバイスや激励が込められた手紙である。またこの手紙で測量隊が、量程車を使用していたことがわかる。

※「高橋至時書簡」(上原久 小野文雄 広瀬秀雄編『天文暦学諸家書簡集』所収、書簡(二十一))

第六日 木更津から金谷まで(木更津市・富津市)

六月二十四日 この日は晴れており、六つ半前(午前七時前)に宿を出発している。貝渕村(六五軒) 櫻井村(二八三軒)(周准郡に入る) 小濱村(五七軒) 畑沢村(八八軒) 坂田村(七三軒) 大和田村(三三軒) 人見村(二〇九軒)と測量した。人見村の項に「村に妙見あり登山、所々測」と測量日記に記してあり、一行は妙見社山頂に登り、ここから富士山の方位を測っている。この山は海で働く漁師たちの目印となっていた。この妙見社が現在の人見神社である。大堀村(一五一軒、富津市)から青木村(一一五軒)に入ると、飯野藩(保科氏一万石)陣屋の代官手代吉田又兵衛が測量隊に挨拶に出ている。西川村(七五軒)で富士山の方位を測り、新井村(四四軒)を経て、富津岬の先端まで測量し、八つ半(午後三時頃)に富津村(四五〇軒・二五五〇人)に到着した。宿は名主嘉右衛門宅である。この日の木更津村から富津村までの測量距離は、三里二四町五〇間(一四四〇七竈)であった。夜間の天体観測では三十五度一八分であった。忠敬の泊まった嘉右衛門家は、現在の織本哲郎家で、富津村の名主をつとめ、嘉右衛門を名乗っていた。織本家でよく知られた人としては、小林一茶と交流のあった俳人織本花嬌(文化七年没)がいる。花嬌は七代目嘉右衛門(寛政六年没)の妻であった。忠敬が宿泊した時の当主は八代目嘉右衛門の時ということになる。

第七日 富津から湊まで (富津市)

六月二十五日 この日は朝より曇りで、六つ半前(午前七時前)に出発したが、途中で雨が降りだしている。川名村(七八軒) 篠部村(七五軒、海は川名村と入会) (上総国天羽郡に入る) 大和田村(五一軒) 岩瀬村(七五軒) 小久保村(二八四軒) 大坪村(四二軒) 八幡村(八八軒) を経て、湊村(二〇〇軒、九六〇人) には、八つ半(午後三時)に到着した。宿は五郎右衛門宅であった。湊村でも富士山の方位を測っている。この日の富津村から湊村までの測量距離は、四里一町一〇間(一六八・一七・二¹/₂)であった。夜間の天体観測では三十五度一三分であった。宿には百首村役人が挨拶に来ている。この日泊まった五郎右衛門宅の場所については、現在確認できていない。

第八日 湊から金谷まで (富津市から鋸南町)

六月二十六日 朝より晴れており、この日も六つ半前(午前七時前)に出発している。百首村(四九〇軒、二四九五¹/₂人) 萩生村(二四八軒) で富士山の方位を測り、金谷村(四二七軒) に八つ半後(午後三時過)に到着した。宿は名主四郎右衛門宅である。この日の湊村から金谷村までの測量距離は、二里一四町五九間(九四三・三八¹/₂)であった。夜間の天体観測では三十五度一三分であった。宿に保田町・大帷衣村・吉濱村・大六村の村役人が挨拶に出ている。宿となった四郎右衛門家は、代々金谷村の名主をつとめていた。現在の鈴木士郎家である。幕府の巡見使が房総を巡回する時の宿をつとめる家でもあった。伊能中図には、この金谷から富士山の方位線が引かれている。

第九日 金谷から吉浜まで (鋸南町)

六月二十七日 この日は曇り少し晴れの天気であった。六つ半(午



前七時頃)に宿を出て、安房国平郡に入り、元名村(九七軒・六二四人、鋸南町) 本郷村(保田町と記す、二七四軒、一四一八人、御朱印一五石日本寺) 大帷衣村(二二九軒)と測り、九つ後(正午過)に吉濱村(九三軒、四五〇人、御朱印五〇石余、妙本寺)に到着している。宿は吉濱村名主の久右衛門宅であった。日記には元名村の項に「日本寺御朱印十五石余、日本寺を保田村と覚る相違なり、元名村なり」と記している。伊能中図をみると、吉浜村から大六村にかけては、

海岸から離れ迂回して測量を行っている。この日の金谷村から吉浜村までの測量距離は、一里二三町一三間（五三四〇・六六〇）であった。

夜間の天体観測では吉浜村の緯度は三五度八分であった。久右衛門家は、寛政年間から享和年間にかけて吉浜村の名主をつとめ、その場所には現在の保田漁業組合事務所の地にあったという。忠敬の記録に地震に關したものである。「四月十四日至十五日房州平郡より上総地震至三十余度、土蔵小損、大震三四度、往古ノ大地震より九十九年になると云」と、上総から安房国にかけてかなり大きな地震があったことを伝えている。忠敬自身がこの地震を体験したのは、三浦半島の上宮田村（三浦市）に泊まつた四月十五日の早朝のことであった。四月十五日の日記には、「朝七時半頃大地震」と記している。

安房国に入り、地元の人々の話をもとに、地震当時の様子についてメモしたと思われる。往古ノ大地震より九十九年というのは、元禄十六年（一七〇三）十一月二十三日に起こった元禄地震のことを指している。地震のあとに発生した津波により、上総国・安房国での死者は三四〇〇人余・潰家八四〇〇軒余などの大被害が発生した。安房国の海岸線も隆起と沈降による変動があり、津波被害の多かった吉浜村周辺の人々にとっては、元禄地震はなお強烈な思い出になっていたものと思われる。

第一〇日 吉浜から勝山まで（鋸南町・富浦町）

六月二十八日 この日の天候は曇りで、忠敬らは六つ半（午前七時）に宿を出発した。元名村に立寄り、村役人の案内で鋸山へ登り、高所からの方位を測定している。伊能中図には鋸山から富士山の方位線が記されている。日本寺で休息し、この時に見せてもらったものについて「保田村日本寺和尚 イキリス曆一二枚を得テ珍藏ス」と忠敬は書いている（「忠敬先生日記 二」）。また算用数字で「1795」と横

に書き、「二千 七百 九十 五年」とその読み方の注記をしている。更に「MAY」とアルファベットを書き、その脇に「ム ア エイ」と読みをいれ、「五月ノコト」と注記している。イギリス曆については、あとでまた触れるが、忠敬の注記から、英語のカレンダーと理解してよいと思われる。

それより引き帰して大六村（七七軒・三五七人） 竜島村（二五〇軒・六七五人）を経て、八つ後（午後二時過）に勝山村（三〇一軒、鋸南町）に到着した。勝山村でも富士山の方位を測っている。勝山村には勝山藩酒井氏一万二千石の陣屋が置かれていた。忠敬たちは勝山村の名主又右衛門家に泊まつている。この日の吉浜村から勝山村迄の測量距離は、一里三〇間（三九五四・六〇）であった。夜間の天体観測では、三十五度六分三〇秒であった。宿に岩井袋村・久枝村・下佐久間村の村役人が挨拶に出ている。宿の名主平井又右衛門家は、寛永年間に勝山が佐倉藩領になった時に、勝山に移り住み、酒造の元請役となった家柄である。日記には又右衛門について「造酒を業とす」と注記している。酒造りは忠敬も行い、佐原の伊能家の主要な商売の一部門であった。平井家は、戦後館山市に移転している。

第一日 勝山から那古まで（鋸南町・富浦町）

六月二十九日 朝六つ半後（午前七時頃）に勝山村を出発している。伊能中図によると、勝山村から岩井袋村にかけてはかなり海岸から離れて迂回測量をしているが、伊能大図によると、険しい海岸線にもかかわらず、測量可能な場所については、岩井袋村側から岬先端部分に向かって測量している。岩井袋村（二〇四軒・五四〇人） 久枝村（一三五軒・七三四人、富山町） 不入斗村（一九四軒） 小浦村（九八軒） 南無谷村（一七四軒、富浦町）で富士山の方位を測り、坂之下

村(七九軒)を経て、岡本村(二二三軒、富浦町)には七つ後(午後四時過)に到着した。宿は浄土宗西方寺であった。竜島村の名主池貝庄右衛門は、測量隊を小浦村まで見送っている。この日、岩井袋村等の村々では、海辺に帆幕を張って休所を設け、測量隊にお茶の接待をしている。房総半島の測量で、測量隊への接待の記録は、ここだけである。

夜間の天体観測について、忠敬は寺の木々が覆い繁っているため、天体観測が出来なかったと書いている。現在の西方寺は国道に面した町中の寺であり、かつて木々が生い茂っていたことを想像することは難しい。宿には多田良・船形・川名・那古の各村役人が挨拶に出ている。なお勝山村から岡本村までの測量距離については、伊能中図の凡例や「大日本沿海実測録」に記されていない。

第二日 岡本から那古まで(富浦町・館山市)

七月一日 早朝の午前六時過ぎに大地震があった。測量隊は六つ半(午前七時過)に岡本村を出発している。この日は晴れたり曇ったりの天候であった。多田良村(二五一軒) 船形村(五〇〇軒、館山市) 川名村(九三軒)と測り、那古村(二二九軒、那古寺朱印高一〇九石余)に七つ頃(午後四時頃)に着いている。多々良村の海岸線については、「この辺の海辺は岩石が多く大難所である」と注記があり、測量に手間取った様子がうかがえる。伊能中図には大房岬の先端から伊豆の天城山への方位線が描かれている。この日の宿は那古観音(那古寺)であった。ここは坂東三十三所の札納所で、寺領一〇九石をもち、那古村の戸数二二九軒の内、百軒は寺領の百姓であった。六月二十九日・七月一日の二日分の測量距離(勝山村から那古村まで)は、四里九町一〇間(一六五九・二里)である。夜間の天体観測では三

五度一分三〇秒であった。この日、正木村・湊村・長須賀村・館山・洲崎村・多田良村・岡本村・船方村・川名村の村役人が挨拶に出ている。安房国での村役人の挨拶の記録は、他の地域に比べて多い。

忠敬は安房国内でのイギリス暦に關しての話題をメモしている。

腰越村(館山市)の延命寺(真言宗)から、領主の北条藩主水野彦岐守に差し上げたイギリス暦について、その出所を藩で取調べた。下真倉村の長泉寺(浄土宗)、同村太七、同村平吉、伊戸村の藤四郎と、次々と前の持ち主の名前をたどり、藤四郎に呼び出しがかり、取調べがおこなわれたというのである。また次のようなメモを忠敬は書いている。「寛政八丙辰十月中旬房州長狭郡川下浦より二里ホト沖へ蜚船来ル、則イギリス船ノ漂流ナリ」。寛政八年(一七九六)は忠敬の測量より五年前のことである。日本寺で忠敬が見たイギリス暦は、「一七九五」とあり、この漂流船にあったイギリス暦が、安房国内にもたらされていたのかも知れない。先に触れた七月二日付けの高橋至時から旅先の忠敬宛ての手紙のなかに「お願いしてありましたイギリス暦は手に入りましたでしょうか。もし手に入ったら飛脚にて送って下さい」とあり、房州でイギリス暦が手に入る可能性のあるような依頼の仕方をしているのである。房州にイギリス暦があるらしいとの噂は、江戸まで伝わっていたようである。(この項つづく)

おめでとつ!

●伊能ウオーク五〇回参加記念メダルを松江で川上さん、鳥取で土肥さんが受賞されました。おめでとつございます。

活動予定の変更

●本年度に予定していた研究発表会(二二号に掲載)は諸事情により延期します。御了承ください。

坂部さんの手紙

伊能 陽子

福岡発十七時の飛行機で帰途についた私は、軽い興奮と安堵感で窓の外に目を泳がせていた。伊能ウオーク関連の講演会で、多少の責任を果たしてのあれこれが、脈絡もなく浮かんでは消えていった。

白い雲がゆつくりと眼下を移動して行くこの時間帯の空からの眺めは私の目には珍しく映り、光の矢が動く様子はただ美しいとしか言いがなかった。そのとき突然、雲の切れ間から海の色と緑の海岸線が現れた。何処だろうか。毎度のことながら、尊敬先生に見せてあげたいと思った。四国？窓に額をくつつけるようにして見ているうちに、また視界は雲に遮られてしまった。

—そうだ、坂部さんの手紙を福江に持っていこう—

どうしてその時、そう思ったのか、いま考えても不思議でならない。とにかく私の頭の中は、坂部さんの手紙の事で一杯になっていた。

帰宅した私は、夫に福岡での報告を済ませ「今度福江に行くとき、坂部さんの手紙を寄贈したらと思うんだけど、どうかしら。」と言った。彼は「えつ」と驚いた様子で私の顔を見、考えていたようだが「うん、いいだろう。」と答えが返って来た。これで、決まり。

まずは安藤さん、坂部貞兵衛書簡を世に出してくれた人に私の思いを伝えねばと、受話器を取る。

甥（八代目当主）と二人の姉も同意してくれた。それから何人かの意見を聞いた。専門的には資料は一か所におくべき、やはり佐原にあ

った方がいいのではないかと、当然の返事もあったが、殆どの方が私の唐突な「ひらめき」に賛成して下さった。

伊能忠敬の遺品は、重要文化財の指定を受けている二一五点を含め殆どが、千葉県佐原市の「伊能忠敬記念館」に収められ保存されている。これは遺品の散逸と破損を恐れ、また後学の人々の研究のためにと、両親（忠敬から六代目）が国と県と市の協力による記念館が建ったときに、寄贈したからである。昭和三十六年のことであり、現在は平成十年に完成した新しい記念館に移され、多くの人を迎えている。

また、遺品とともに史跡に指定されている忠敬旧宅を寄贈した際に、三百年前の埃と一緒に、記念館に収められなかった反古やガラクタが、両親や私たちの住む世田谷の家に運ばれて来た。その反古を整理する役目が回ってくるなどと、当時の私は思ってもいなかったことであった。

世田谷伊能家文書として、夫・洋と佐原小学校の同級生であり、元国会図書館勤務で古文書のベテラン、願ってもない助っ人である安藤由紀子さんの協力を得、その反古の整理を始めたのが十二年前のことであった。ある日、私たちは、かなり乱雑な反古の山の中から、紙縫りで括られた一束の書状を拾い出し、読み始めた。坂部さんとの出会いである。

坂部貞兵衛は、八年間も、忠敬の右腕として測量隊をまとめ、絶大な信頼を得ていた。あの忠敬を、時には諫めたり、励ましたりした人である。福江島で客死したのが四三才であった。手紙の文字をなぞって読むうちに誠実な人柄が偲ばれ、すっかり坂部さんのファンになってしまった。

古文書も歴史にも縁のなかった私は、好奇心と感情移入が中心とい

う素人である。整理のため、文書を一枚一枚手に取り上げるたびに、いつどこで、誰がどんな思いでこれを書いたのだろうと、二百年前の紙をそつと撫でてしまう。そこに込められた何かが、伝わってきはないかと。

「伊能ウォーク」の計画を耳にした当初、私には全くイメージが掴めず、何がどうなるのか見当もつかなかった。二百年前の測量隊の足跡を追い、二年がかりで歩いて日本の沿岸を一周しようという、信じられないような計画に参加する本部隊のメンバーが決まり、昨年一月に東京深川出發を見送ったあと、それでも、早春の房総半島を皮切りに、私はいつの間にか本部隊を追いかけて、各地を飛んで回るようになった。

伊能ウォークに参加して私自身が得たものは数え切れないほど沢山ある。歩くということを始め、多くの人との出会い、その地の風景、食べ物、言葉などの個性豊かな面白さは勿論だが、各地に故郷のヒーローが大切に愛され、生き続けていることを実感したのも、そのひとつである。その場所に立ち、そこに生まれ育った人々に会って話を聞くと、改めてその故郷で守られている主人公が、浮かび上がってくるような気がした。そしてまた、忠敬の「測量日記」もその地の人が読んでこそ、深く理解が出来るのだとつくづく感じた。故郷を愛する方々の熱情は素晴らしく、強い。

先祖の残したものを守り伝えるということは、とても大変なことがある。時代の移り変わり、価値観の変化、そして受け継ぐ者の考え方で、遺品は大切に保存されたり、消滅したりする。伊能ウォークのお陰で久々に再会した松山の友人が、幼い頃、父親が古い蔵の中の文書

や器物を燃やしていた炎の色が、忘れられないと話すのを聞き、同席の郷土史家ともども大きなため息をついてしまった。彼女の家は、大庄屋であつたから、測量隊受け入れの記録があつたに違いないのだ。

祖母(五代目)は、旧宅で生まれ八十八才の天寿を全うするまで、忠敬遺品を守り、長年にわたり毎日のように訪れる大勢の見学者に、懇切丁寧な説明をしていたそうである。母もまた、戦時中の遺品の疎開や、記念館に収めるまでの大変な仕事をやり遂げて来た。母のそばで見聞きしていた私が、最後の整理を担当するようになったのは、ごく自然な流れであつた。もともと、兄(七代目)が大学教授の任務を終えたらバトンタッチする約束であつたから気楽に取り掛かったのだが、五年前、兄の急逝という事態とともに、私の肩にずつしりと重荷がのつたのである。

長崎空港から乗り継いだ飛行機の窓から、五島の島々がはつきりと見えた。こんな沢山の島の一つ一つに、測量隊の足跡が刻まれているのか、そして、あの坂部さんが眠っているのかと思うと胸が熱くなつた。

福江空港で伊能忠敬研究会会員の野さんはじめ、資料館、観光協会の方々のにこやかな笑顔のお出迎えを頂く。「坂部貞兵衛書簡十通福江市への贈呈」を大変喜んで下さり、翌日の伊能ウォーク福江大会で早速お披露目をしたいと準備をして待っていて下さつた。

案内していただいた福江島のそここに、百七十八年前の測量隊の姿が目につかぶようであつた。宗念寺の墓所は、想像以上に立派で、長い間坂部さんのお墓を守つてこられた皆さんの温かい心が感じられ、ただ感謝の気持ちで一杯になつた。そして、志半ばで倒れた貞兵衛の

悲しさ悔しさと、最も頼りにしていた人を失い、ここへ残して行かねばならなかった忠敬の苦しみを、改めて思った。

福江では、坂部貞兵衛は立派な主人公であり、そして、ここは彼の永住の地になっている。やはり坂部さんの手紙を持ってきてよかったと、安堵した。

貞兵衛の出身地ははっきりとは分からず、子孫の方のあてもない。佐原の記念館に置くのが自然だとも思えるが、佐原では、あくまでも忠敬の部下の一人である。私は、彼を主人公にしたかったのである。

福江市の信頼できる方々の手にゆだねて、立派な五島観光歴史資料館に展示された貞兵衛の書簡を一人でも多くの人に見ていただき、彼が生きていたこと、立派な仕事をしたことの証しになってほしいと願うのだ。

安藤さんと一緒に来られなかったのが残念でなかった。坂部貞兵衛を、江戸東京博物館での「伊能忠敬展」の大会場で紹介できことを、涙が出るほど喜び、以前福江島を訪れたときのあれこれ話してくれた彼女が、出発四日前の交通事故のため、参加出来なかったのである。

しかし、災い転じて福としよう。安藤さんと一緒に、再び坂部さんに逢いに行こう。高浜の海の色を、画家である夫にどうしても見せたい。ゆっくりと見て回りたい所が沢山残っている。

福岡で初めてお目にかかった野さんの風格あるお姿と故郷を思う熱気溢れたお話しぶりが、私の「ひらめき」の発火点だったかもしれない。



福江島を訪れた会員一同(中央は野圭志さん)

伊能古文書教室・佐原伊能家史料を読む

『佐原邑河岸一件』(二)

小島一仁

忠敬、油をしぼられる

三郎右衛門と茂左衛門の兩人を問屋として認めてほしいという願書を出したので、また奉行所から呼び出しがあり、願人の三郎右衛門と茂左衛門、名主惣代の次左衛門、組頭惣代の宗右衛門、船持百姓惣代の金藏・利右衛門の六名が、二月三日に出頭した。この度の願書と、昨年中に出頭した者たちの口上書の控えについての吟味が行われた。

まず、吟味役の佐藤友五郎から、「佐原村は利根川とは十四、五町も離れていて、問屋も河岸場もない村だということだが——」という問いが立った。これについて三郎右衛門(忠敬)が答えた。「佐原村は利根川から二、三町ほど離れていて、私ども兩人が昔から問屋をつとめてまいりましたが、川岸役(税)を納めるほどの場所でもないの、荷主たちが自分勝手に運送しておりました。しかし、今後は川岸役を差し上げますので、どうか、私ども兩人に限って問屋を仰せつけ下さるようお願い致します。」

ところが、吟味役の佐藤友五郎から

「昨年中、村役人惣代の者が申すには、佐原村は利根川を離れることと十四、五町で利根川ぞいの村ではなく、川岸も問屋もないというので、今後は近河岸の送状で通船するようにと申しつけたところ日延願をしたが、此の度のお前の申し口は、以前とはまるでちがうではない

か」

と叱りつけられた。そこで、名主惣代の宗右衛門が申し上げた。

「昨年は心得違いをしてお答え申し上げましたが、帰村の後、小前どもを集めて取り調べましたところ、前々、問屋と申ししてきたものは、右の兩人ですが、川岸役を差し上げることもなく、商人たちが自分の送状で運送しておりましたので、問屋はないものと心得、不埒なことを申し上げました。この度の御吟味により、どうか兩人に問屋を仰せつけ下さい。」

しかし、吟味役から、またまた

「佐原村から利根川まで、去冬は十四、五町も離れていると申したのに、此の度は二、三町というのはどういうわけか。」と叱りつけられてしまった。

これについては宗右衛門も

「十四、五町というのは、佐原村の中に小川にかけた橋があります、そこまでおよそ十四、五町ありますので、そのように申し上げたのですが、居村の川岸の家からは二、三町はなれており、利根川にそそぐ小川の川口にも人家があります」

などと、しどろもどろの答えしかできず、ただ、佐原村は利根川ぞいの村であり、三郎右衛門と茂左衛門の二軒の家が、昔から問屋をつとめてきたことを認めてもらおうと、必死に弁明するだけであった。

その後、吟味役からは、近川岸までの距離、佐原川岸で扱う荷物数、積出しの口銭や倉敷(荷物の保管料)についての取調べがあったが、最後に、「三郎右衛門、茂左衛門両家が川岸問屋運送の業を行ってきた証拠があるかどうか」という問いが立った。

三郎右衛門が、

「証拠といっても、佐原村は家並の土地で何度も類焼したので、只

今では、享保前後の帳面よりほかにあるまいと存じます」
と答えたところ、

「帳面は自分で書くものであるから証拠にはならぬ。証拠がなければ、近川岸の送状で運送するように」

と申し渡された。そこで、佐原村の一同は進退きわまり、一たん白砂をさがって相談し、また、次のような日延帰村の願書を差し出した。

川岸役書附奉願上候

中総国香取郡佐原村人左之通者共奉申上候、
私共願之儀、三郎右衛門茂左衛門両人先規問屋と
申上候儀、証拠書物等二ても有之哉、申口のみ
にては御取用難被遊段被仰聞候、御尤二奉
畏候、尤三郎右衛門茂左衛門義は往古祖父代以前
よりも運送引請候二付、縦近年荷主とも
自分送状にて運送仕候もの有之候とも
古き帳面書物等在所二所持仕候間、何卒
早速持参、証拠にも可相成品二御座候哉
奉差上度奉存候間、来ル十五日迄御吟味御
日延被成下候様二此上之御慈悲奉願上候
以上

明和九辰年二月

願人 三郎右衛門

茂左衛門

御奉行所様

この願書を差し出して、帰村を申しつけられたとき、吟味役は、「帳面でも何でも、証拠になりそうな書付を持参するように」と言った。以前には、「帳面は証拠にはならぬ」と言ったのに、今度はそれとちがう言い方なので、三郎右衛門は、少し氣をとり直した。

川岸役永壹貫五百文

吟味の翌日、二月四日から連日大雪が降りつづいた。しかし、忠敬は、降雪をものともせず四日午後には江戸を出立。行徳（ぎょうとく、市川市）、木下（きおろし、印西市）を経て、六日の夕刻に佐原に帰着し

所奉行所様

明和九辰年二月

願人

三郎右衛門
茂左衛門

和文と云つて漢文と云ふては通にお違ふ事ある
 何と云ふ國屋と云ふは石田人と云ふは石田と云
 ふは石田初と云ふは石田初と云ふは石田初と云ふ

江氏之
家
百代
金

乍恐以書附奉申上候

下総国香取郡佐原村三郎右衛門茂左衛門申上候

私共村方運送之儀二付御尋御座候所、私共

両人之儀は先規より問屋と申伝運送請

拂仕候段奉申上候処、証拠二可相成帳面書物

にても有之哉之旨被仰聞候二付、当十五日迄御日延

奉願上、則所持之帳面書物奉差上候、尤私共

船問屋荷物請帳は数年来の義に御座候

得とも其年二仕切勘定相濟外二可用帳面毛

無之故古帳面等は破帳仕、尤裏返し候而相

用候事故反故二相成、當時相用候帳面奉差

上候、尤荷物運送仕候請取書有之候間

是亦奉差上候、此儀も年々相濟候事故

紛失も御座候得共、有当り候書物奉差上候

何分御勘弁奉願上候、且私共村方は壹ヶ月二

六度之市場ニ御座候ニ付、近在より売買人入込諸

色共に請拂仕、其上酒造醬油共二三拾七人有

之、右のもの共冥加二金三拾七兩貳歩去外ノ

十二月より上納仕候御請二御座候、是等之儀も江戸

出し運送私共引請仕候義二御座候、右躰二付

此上万一外河岸等之支配二も相成候様行成

申候而は佐原村市場も自然と衰微二相成

物事差支千軒余之小前之者甚難義仕候

其上酒造醬油御運上之儀も差支手遠二相

成候得ハ後々上納物等も難相成躰二行成

候而八是又及難義候、則私共兩人迎も酒造

醬油冥加金上納仕候もの共二御座候間、何分舟間

屋私共兩人方江被仰付被下置候様二奉願上候

尤御運上之儀は御吟味之上御請可仕候間

此上之御慈悲奉願上候、以上

遠藤兵右衛門御預り所

下総国香取郡佐原村

明和九年辰二月

願人
三郎右衛門

茂左衛門

御奉行所様

本文三郎右衛門茂左衛門奉申上候通相違無御座候

何分舟問屋之儀は右兩人之者江被仰付被下

置候様、私共一同奥書を以奉願上候、以上

名主惣代

次右衛門

組頭惣代

宗右衛門

百姓代

金蔵

川岸問屋とは直接関係のないことではあるが、右の願書を見ると当時、佐原村には、酒、醤油の醸造人が三七人もいたと記されている。

伊能家の『家牒』によると、佐原村での酒造は、寛文年間に、五代目景知によつてはじめられたようであるが、それから約一〇〇年後の明和・安永の頃が、佐原の醸造業の最盛期に当たっていたのではないかと思われる。

さて、それはともかく、右の願書と証拠書類の提出によつて、三郎右衛門と茂左衛門の二人は、佐原村の川岸問屋として公式に認められることになった。そこで、次の問題は、川岸役をどれだけ上納すべきかということであった。

最初、「兩人で永二五〇文差し上げます」と願ったところ、吟味役から「そんなことでは相済まぬぞ、もともとお前たちの方から願ひ出たことなのだから、そのくらいなら願ひをやめたらよからう」と叱られ段々額がつけり上げられて、結局、二人で永壹貫五百文上納することになった。「永」とは「永楽通宝」の略で、「永壹貫文」といえば、金壹両に当る。従つて、金に換算すれば、三郎右衛門と茂左衛門の二人で、一年に、金壹両貳分を上納することにきまつたのである。

芳名録

より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

精緻

大正二年
仙臺
林鶴一

林 鶴一 (一八七三—一九三五)

数学者。徳島市の人。東北大学教授。「東北数学雑誌」を創刊して日本数学界に新研究の機運を作った。

(広辞苑)

伊能忠敬宛江川英毅書状と伊豆測量 (三)

小森正和家文書について

仲田正之

前回紹介した(8)の報告状と対比できる資料が、小森正和家文書(天城湯ヶ島町門野原)中にある。一連の測量関係文書からつぎの三点を選んで、行程などについて説明しておこう。
ここにあげないものには、人馬調達・宿泊賄入用などの書上がある。

(九)測量に関する触書(文化十二年)小森正和家文書

申渡書

天文方

高橋作左衛門手附

下役三人

伊能勘解由

弟子式人

棹取中間

式人

右者此度為測量御用當月廿七日江戸出立、別紙道順之通り、国々相廻り測量可致候間、其段可相心得候

一右ニ付他領ならば二嶋々江渡海之節者船ヲ出し差支無之様可致候、尤測量道具為手入止宿いたし候儀も可有之候間、是又差支無之様可取計候

一廻国先ヨリ江戸頒曆所江御用状差出候儀も有之候ハ御用便ヲ以可相

届、江戸表ヨリ廻国先江御用状差出候節心當之場所可相達候間、其所江到着以前候ハバ着之上相届、出立後二候ハバ先々相届候様可致、右之趣土太炊頭殿・青下野守殿被仰渡候間申達候

但本文之趣万石以下最寄知行所之分江も先々江申継、差支無之様可取計旨可相達候

亥四月

一江戸出立、無測量ニ而、東海道三嶋ヨリ測量相始、天城通り豆州下田迄相測、同所ヨリ八丈嶋江渡海、伊豆国付嶋々不殘測量、終而下田江帰帆、同所ヨリ海辺ニ随ひ相州小田原迄測量いたし候

一海辺測量終而、無測量ニ而根府川通豆州熱海江罷越、同測所ヨリ量相始、街道通、三嶋・佐野通り箱根湖水相測、夫ヨリ駿州大宮街道通り富士浅間・富士三ヶ寺井ニ内房村網橋まで測量以多し、右街道筋最寄ヨリ柏原新田広沼相測、夫ヨリ無測量ニ而東海道吉原江相越、同所ヨリ測量相始、十里木街道通久原村ヨリ駿州御殿場道佐野夫ヨリ相州仙石原通湯本まで相測、夫ヨリ無測量ニ而東海道平塚まで相越、同所ヨリ測量相始、厚木通荻野中山(ママ)、夫ヨリ橋本・鶴間通り武州中渋谷村字大和田迄測量いたし、鶴間ヨリ東海道藤沢宿迄測量い多し候

一字大和田ヨリ無測量ニ而鶴間江立帰り、同所ヨリ測量相始、座間通武州八王子ヨリ日光街道通り中山道熊谷迄測量、右街道筋最寄之場所ヨリ川越まで測量いたし候、
一熊谷ヨリ鴻巣夫ヨリ荒川ニ随ひ、堤通千住夫ヨリ小塚原町迄測量いたし候積

右道順書之通、国々相廻り、尤其所之様子ニ而最寄山々城下街道等も相測候間少々宛前後も可相成事

別紙之通御書付を以被 仰渡候間、得其意、諸事差支無之様可取計
候、且万石以下最寄知行所之分江ハ先々申繼、是又差支無之様可取計
候、此廻状村名下江名主令請印早々順達從留村可相返候、以上

亥四月晦日

葦山御役所

別紙之通御書相廻り候間、右最寄知行所村々江申達候処被仰付候間、
諸事差支無之様御取計可被下候、以上

亥市四月晦日

瓜生野村

名主 武右衛門 印

下修善寺村

印

小立野村

印 御用二付組頭代印

本立野村

印 御用中代印

太平村

印

松ヶ瀬村

印

下柿木村

印

門之原村

右村々

御名主・組頭 中

これは、渡海・止宿等通行の便宜・江戸歴所と出張先との御用状取
計らいにつき、老中土井大炊頭(利和)・青山下野守(忠裕)達旨の「申
渡書」(亥四月)と、「別紙道順書」からなる。これは御領、私領くま
なく達されるもので、その意をうけた葦山役所より四月晦日付をもつ
て、測量関係方面村全域に指示された。それをうけた廻状元村の瓜生

野村(修善寺町)名主武右衛門から、同じく四月晦日付をもつて、下
修善寺村―小立野村―本立野村―太平村―松ヶ瀬村―下柿木村―門之
原村へ伝達された、この「名主請印状」が末尾に綴じこまれている。

別紙道順書によれば、第一段階は四月二十七日江戸出立、三島まで
無測量、三島より開始して下田まで測量、渡海して伊豆諸島全島測量、
下田帰帆、同所から小田原まで海辺測量、の予程である。しかし、(8)
の報告状にみられるように、下田で日和待の間も連日測量が実施され
ている。平成六年三月二十一日の「伊豆日日新聞」に鈴木茂氏の「米
屋文書」(伊東市川奈、前島家)より、伊豆測量関連文書の紹介が掲載
された。掲載された写真より見ると御用留横帳の部分であるが、出典
名の記載はない。

一文化十二亥年五月、公儀天文方国々島々測量、高橋作左衛門殿下
役永井甚左衛門殿坂部八百次殿門谷清次郎殿伊能勘解由弟子式人、五
人富戸より川奈海岸通新井堺かんら迄案内いたし候

これのみる限り、五月中に下田より川奈・新井の境界「かんら」(神
浦)までの測量は終ったようである。下田出港が五月十八日であるの
で、(8)の報告状の五月十一日からの間に実施されたものと考えられ
る。伊豆諸島の測量は同年十一月八日にまで及んだ。目にする機会の
多い八丈島の図はこの時の測量によるものである。

第二段階は、海岸測量終了後根府川通熱海から三島まで、三島・佐
野通から箱根湖水を測量。それより駿州大宮街道通りに移り、富士淺
間・富士三ヶ寺ならびに内房村網橋まで測量、それより平塚まで移動
して測量再開、厚木通りを荻野山中まで、それより橋本から鶴間通り
を武州中渋谷村字大和田まで鶴間より藤沢宿まで測量。

大和田から鶴間にもどつて測量再開、座間通り八王子より日光街道
通り中山道熊谷まで、この街道筋最寄から川越まで測量。熊谷より鴻

巢、それより荒川に随い堤通千住、それより小塚原まで測量。

下田の日和待で日程が狂ったように、すべてこのとおりであつたとは思われない。しかし、陸上においては大きな狂いはないはずで、下田帰港後発せられた行程表が発見されれば明らかになることである。

(二〇) 測量御用御触書 小森正和家文書

文化十二年
門野原村
御用御觸書扣帳
名主 善右衛門
亥五月三日夜五ツ時

(縦帳)

覚

品川

一御請印帳よこ

沓冊

一御證文写

三通

一添觸

沓通

一御用先觸

沓通

測量方

一添觸

沓通

一休泊付

測量方

一御本紙

沓封

七品御箱入

一買上帳

沓冊

一御送紙

沓状

一御用泊觸

測量方

三本御入

明四日本立野村出立泊所繰替、左ノ泊り順ニ相越候条得其意、宿用意可有之候、且先達而相觸候通り村々書付相認、前之泊り江持参可有之候、以上

亥五月三日

測量方

御印

四日泊門の原、五日泊 萱野新田

六日泊り梨本、七日泊 蓮臺寺

八日泊下田町 右村々役人中

五月三日 夜五ツ半時

本立野村ヨリ受取申候

覚

一御勘定御奉行様御連印御證文

沓通

右者此度測量為御用御役人中ならびニ御荷物御差立ニ付被成御渡候間則差越申候、尤御證文之内よ古れ三ヶ所有之、其外墨付よこれ等無之候間、大切ニ致拝見早々継送可被申候、以上

亥四月二十六日

御伝馬役

高野新右衛門 印

従品川宿御用先迄

右宿村問屋名主中

御證文

覚

一人足七人

一馬四疋

一長持老棹持人足

質馬老疋

門谷清次郎 印

坂部八百次 印

永井甚左衛門 印

右之通御觸

江戸傳馬町

東海道三嶋宿

天城通り下田迄

問屋名主組頭中

覚

一御證文写

三通老通

一御先觸

老通

一御休泊附

老通

箱入

御伝馬役

高野新左衛門

印

御用先キ

所々問屋名主組頭

一人足七人

一馬老疋

一長持老棹

永井甚左衛門

坂部八百次

門谷清次郎

亥四月 備前印

御上下拾老人様也

馬三匹 天文方高橋作左衛門手附下役永井甚左衛門 坂部八百次 門

谷清次郎

亥四月 備前印

外御證文御觸なかし老通

ベ三通なり

亥四月

備前印

一品川問屋御請印横帳 老冊

一御泊付 老通

一御先觸 老通

一御案組帳(カ) 老通 箱入

右藤沢宿ヨリ添書なり

四月二十八日

藤沢町

杉山弥兵衛

從平塚三嶋北条下田まで

覚

錢六貫九百文わ(カ)り米老升代七拾四文也

一木錢百七拾九文

御上五人様

一同 百六文

御下六人様

一白米五升五合

御上下拾老人様

代四百廿式文

七百拾壹文

右同文言

亥五月四日

門野原村

名主 善右衛門 印
組頭 儀右衛門 印

文化十二年五月三日夜五ツ時(午後八時半)、門野原村名主・善右衛門(小森氏)の作成になる。測量方の發した御用書類一覽、休泊順、人馬触、休泊經費書上などである。最後の測量らしく幕府事業として權威が附与されたことがわかる。

休泊については、五月四日門野原泊、五日萱野新田泊、六日梨本泊、七日蓮台寺泊、八日下田泊、となっている。(8)の報告状では、二日が北条泊、三日が立野泊(修善寺)であり、四日が門野原、十日前に下田に到着しているから予定どおりである。人馬は人足七人・馬四疋である。

(一一)測量御用方々名前書 (省略)

まとめにかえて

江川英毅の學術交友は、太郎左衛門が襲名であったことから、交友先の研究者に英龍と誤認された例が多い。英毅のすぐれた學術とその交友背景が英龍を育成したのであるから、英毅の交友を実証していくことは英龍認識を深めていくことになる。

最初に述べたように、伊能忠敬と交友のあった江川太郎左衛門(江

運)は英毅であり、それを確認することは伊能忠敬研究にも益するものである。伊能忠敬宛江川英毅書類にみる交際の時期と、文

化十二年伊豆測量の時期は重複する。測量行程は伊豆を中心に相模・駿河・武蔵の葦山代官支配地に関する街道筋である。この測量が、英毅の要請・推奨によるものかはわからないが、後援したであろう。現段階では、二つの状況から推測しているにすぎないが、いずれ新資料を發見して実証したいものである。また、伊豆測量にかかわらず、近世有数の大事業である伊豆測量の経過を明らかにすることは、文化史上、制度史上、交通史上にかかわる有益なことである。さらに、測量の基礎が和算にあり、天保十年蜜社の獄の原因とされる浦賀測量の内田弥太郎まで和算によっている。和算がいつまで測量に用いられたのかも興味あるところである。

安藤由紀子氏の御教示によれば、次第に全国より関係資料が集積されつつある由である。静岡県史調査を洩れた文言、あるいは看過している文書をさらに發見し、この一助となれば幸いである。かさねて、同氏の御教示に御礼申し上げます。

(あとがき) 世田谷伊能家保管史料のうち、重要なものとして江川英毅の書簡がある。これらを紹介して下さる適任者は仲田正之江川文庫長しかいらつしやらないので、許可をいただいた上、平成七年葦山町発行の『葦山町史の葉』第一九号から抜粋、三回にわたって連載させていただいた。(安藤)

作品介绍「蝦夷地測量図」

浅井 京子

本図は明治二十年代、石井重賢(号・鼎湖 一八四八~一九七)によって描かれた測量図で、伊能忠敬の蝦夷地南岸測量を描いたものと推察される。忠敬はこの最初の測量の際には、まだ鉄鎖を使用していないので、本図の主人公は忠敬の後に蝦夷地測量を完成させた間宮林蔵ではないかとする説もある。しかし、忠敬の蝦夷地測量を主題として一幅の絵を構想するにあたって、鼎湖は山を背にした村落を遠望する海岸で地図を作成する主人公を描く事とした。そして画面の意図をより明瞭に伝えるため、老若のアイヌの人、鉄鎖・杖先羅針などの測量器具を配したと考えられる。鉄鎖は伊能忠敬の測量を象徴する器具として、実物に忠実に描かれた杖先羅針と共に選ばれたのである。さらにいうならば、実際の地図制作では本図の机の上で描かれるような作図は野外測量の数値をもとに室内でおこなわれるものであった。



(絹本着色 縦114.1cm×横41.9cm)

加藤 全彦 氏蔵

鼎湖は幼いときより日本画を父鈴木鷺湖(文晁を師とする)に学んだ。安政六年(一八五九)、六世乾山を名のった陶工・三浦乾也の養子となり、のち石井家を継いだ。明治三年(一八七〇)大蔵省に出仕、のち印刷局に転じて同二八年まで官吏生活を続けた。この間、絵画に関する興味は同僚に川村清雄がいたことなどから洋風画に傾いていたが、明治二十年、龍池会(日本美術協会の前身)に入り日本画家としての活動を本格化した。また二十一年には、九鬼隆一を長とする全国宝物取調委員の一行に随行して、近畿地方の社寺に残された宝物の写生にあたっている。こうしたことから次第に歴史画の制作が多くなり、明治二三年の第三回内国勸業博覧会には『豊公醍醐花見の図』を出品し、褒賞を得ている。なお、石井柏亭・鶴三はその子息である。

ところで明治二二年には、東京芝公園丸山古墳上に「贈正四位伊能忠敬先生測量遺功表」が東京地学協会によって建てられ、同二四年、少年を対象にした初めての忠敬伝『伊能忠敬翁』(幸田露伴)が刊行される。こうした明治二十年代に入っの、忠敬顕彰の高まりのなかでこの作品も制作されたのではないだろうか。

なお、明治二六年、鼎湖も所属していた明治美術会の月次会が地学協会で行われることを記す『鼎湖絵日記』の記事は、本作品の成立と直接関係があるとの確証もないのだが、この時期の忠敬顕彰に果たした地学協会の役割を考えると、鼎湖が伊能忠敬へ関心を寄せるきっかけの一つになったかと想像したくなる。また、この作品の旧蔵者であった加藤久太郎(本図の依頼者かもしれない)は万延元年、市原郡八幡町に生まれ、江湖新聞社・民権新聞社・東海新聞社の経営に関わる。明治三九年には千葉町長となり多くの功績を残した。佐倉宗吾に私淑し、詩歌俳句を趣味とし、書画を愛好した人物である。

(富岡美術館 学芸課長)

伊能忠敬の江戸日記 四

佐久間 達夫

一、第五次測量江戸帰着の日から第六次測量出立の日までの記 続き

原本 忠敬先生日記 十九

四月十日

朝より天氣に成る。午後より白曇。

四月十一日

朝より曇。五ツ後より段々雨。終日降る。

四月十二日

朝より晴天。坂部貞兵衛金四十一兩持参下さる。浅草より差下墨十丁御使に遣す。昼後より曇る。

四月十三日

晴、又曇る。

四月十四日

午前晴、午中晴る。午後より曇る。此夜八ツ後月食あり。

四月十五日

宵より朝雨、午後迄降る。

注 釈

・会田算左衛門(二七四七〜一八一七)

会田安明は、通称を算左衛門といい、号を自在といった。算学者として著名。関流に対

抗して最上流を称えた。天文学者ではないが、「天文簡要論」「地周直径里数術」などの著述がある。伊能忠敬の内弟子として全国測量に従い、「伊能東河先生流量地伝習録」を編述した渡辺慎(尾形敬助・頭次郎ともいう)は、会田安明の実子だといわれている。

・松野茂右衛門 山鹿八郎右衛門

津軽藩士。忠敬の江戸宅に屢々訪れる。

・大野弥三郎規行

江戸神田松枝町の時計師で父の弥五郎規貞とともに伊能忠敬が全国測量に携帯した象限儀や折衷尺などの測量機器の製作にあたった。

・伊能七左衛門

伊能三郎右衛門家初代景久の二男七郎右衛門の二男七郎左衛門が佐原村横川岸(現宝すし前の一角)に分家したのが七左衛門の祖である(伊能家譜・伊能景敬萬世記)

三代清茂の妻リヨは、伊能三郎右衛門家六代景利の娘であり、五代景茂の二男清茂は伊能家九代長由の娘ミチ(忠敬の本妻)の先夫である。また伊能家十四代景徳(端美)は、七左衛門成徳の二男である。伊能三郎右衛門家十六代敬氏の弟洋氏が七左衛門家の墓地の管理をしている。

・高橋善助(二七八七〜一八五六)

高橋善助は、高橋至時の二男で、天明七年に大阪に生まれた。伊能忠敬に従って第五次測量に参加し、文化五年八月に天文方渋川富五郎正陽の養子になり、翌年家督を継ぎ天文方となる。通称を助左衛門、字を子申、号を滄洲、三角堂といった。天保七年に父至時の遺業である「ラランデ曆書」の訳解を完成させ「新功曆書」四〇冊、「新修五星法」一〇冊を幕府に上呈した。又弘化元年には「寛政曆書」三五冊、同統録五冊も完成させている。

・神保庄藏

伊能忠敬の父、神保理左衛門貞恒の孫忠則の幼名である。貞恒には三人の子があり、長男貞詮(忠蔵)が家督を継ぎ、長女フサが南中村の平山佐兵衛泰光に嫁ぎ、二男であった忠敬が佐原村の伊能家に入婿した。貞詮の長男が幼名を庄藏、後に忠則といい、二男庄作(延宣)は忠敬の第六次測量に同行した。

・松田 琴

松田琴は忠敬の三女で、常陸国竜ヶ崎村(現茨城県竜ヶ崎市)で代々庄屋を勤めた松田文右衛門家に嫁いだ。夫は光遠といい、二人の間に一子文一郎がいた。

菩提寺は、竜ヶ崎市の大統寺であったが、後に東京都江東区三好町の浄土宗撰心院に移された。法名は「般山智舟大姉」という。

・永沢吉郎兵衛俊安

祖父は伊能七左衛門の二男で、義父は永沢忠右衛門尚俊。妻は永沢仁兵衛軌景の養女ソノである。

俊安の妹セヤは、常陸国潮来村(現潮来町)の窪谷庄兵衛維則に嫁いだ。夫に早死され、妙真と名のり、生涯和歌や書道をたしなんだ。

文化四年(一八〇七)四月十六日、此日曇る。

四月十七日 記入なし。

四月十八日 此日雨。

四月十九日 浅草へ行く。それより長者町高橋三平殿へ高橋君同伴にて行く。夜雷雨。

四月二十日 晴天。

四月二十一日 朝より晴天。

四月二十二日 同断。四月二十三日 同断。

四月二十四日 曇天。此日旅扶持方返納。

四月二十五日 朝より雨。終日降る。

四月二十六日 朝より晴天。此夜晴。遠鏡十字切れ不測量。

四月二十七日 晴天。午前中前後晴。

四月二十八日 曇天。同じ。

四月二十九日 曇天。同じ。夜雨。高橋富右衛門来る。

五月朔日 朝より小雨。四ツ頃止む。曇天。

大家来る。

五月二日 微雨。午後より止て曇天。

五月三日 曇。又小雨。

五月四日 朝曇。又微雨。此夜雨。

五月五日 朝より大雨。午後より小雨。

五月六日 曇天。

五月七日 午前曇る。午後晴る。

五月八日 朝より晴天。

五月九日 朝より小雨。終日小降り。

五月十日 朝白雲多し。午後より白雲。

五月十一日 晴る。白雲多し。午後より白雲。

五月十二日 朝より曇。終日白雲。微雨もあり。

五月十三日 朝より晴る。午中曇。午後小雨。

五月十四日 曇天。微雨。浅草へ午後に行く。

此夜大雨。

五月十五日 晴天。五月十六日 晴天。

五月十七日 晴天。

五月十八日 晴天。白雲あり。

五月十九日 晴天。雲多し。夜晴天に成測量。

五月二十日 朝曇。昼も晴曇。

五月二十一日 朝より曇。微雨。東風。伊能三郎右衛門来る。

五月二十二日 終日曇天。小雨。東風。

五月二十三日 曇天。微雨。東風。

五月二十四日 曇。微雨。午後より晴曇。夜は曇天雨あり。

五月二十五日 曇天。朝雨。時々雨。東風。伊能三郎右衛門箱崎町迄行き明日帰国する積り。

五月二十六日 晴曇。須藤甚右衛門来る。小雨あり。夜晴る。

五月二十七日 晴曇。朝は曇。午前より晴る。

五月二十八日 曇る。

五月二十九日 曇天。時々雨。板鼻良助来る。

弥三郎、富田才兵衛、俺の測器を持ち来る。

五月三十日 朝より小雨。又止て曇天。富田才兵衛来る。測器を渡す。

六月朔日 午前曇天。微雨あり。八ツ頃高橋子来る。此夜大雨降る。

六月二日 朝より大雨。七ツ後に至る。七ツ後より、小雨。

六月三日 朝より大雨。午後に至る。八ツ後より小雨。七ツ前より止む。

六月四日 朝曇。昼も晴曇。此夜晴高橋測量。

六月五日 終日曇天小雨。

六月六日 曇。午後微雨あり。

六月七日 朝より雨。終日小雨。今井友治来る。

六月八日 朝より雨。午後微雨。

六月九日 朝より曇天。微雨あり。

六月十日 朝より晴る。稲葉丹後守用人坂口奎之允、間氏添状持参来り暫時。

六月十一日 朝より白雲。

六月十二日 朝より曇。八ツ半後に微雨あり。昼より桑原隆朝へ行く。それより近藤重蔵へ行く。六分図二枚。

六月十三日 曇天。小雨。

六月十四日 晴曇。午後より浅草へ行く。此夜晴天。坂部測量。

六月十五日 朝曇天。微雨あり。午後より天氣に成る。

六月十六日 朝曇、午前微雨、午後曇。午後桑原へ寒熱升口、羅鍼持参。餞別金貳百足持参。

六月十七日 朝曇、午前微雨、午中より晴、暮より夜に入り大雨。

六月十八日 朝曇、午前より晴天。午後より堀田撰津守殿へ松前御用の恐れ、並びに暑中見舞申上げ候。それより猿楽町佐藤修理、駿河台鈴木町渋江新之助暑中見舞致し、サヤキ町津田侯へ土用見舞申上げ候所御見通し仰付七ツ前に帰宅。

六月十九日 朝曇る。終日曇る。七ツ前小雨。

六月二十日 朝曇る。四ツ半頃より晴天。

六月二十一日 朝晴曇、午中前後曇る。八ツ前より大雨、七ツ頃止む。それより曇天。

六月二十二日 朝曇る、午前より晴る。

六月二十三日 朝曇る、四ツ前より晴る。三州和泉都築弥四郎来向。富田幸助来る。午後

秋山松之丞殿へ暑中見舞。それより浅草へ行く。

六月二十四日 朝より曇る。四ツ頃より晴る。

六月二十五日 朝より晴、暮に曇、夜晴て測る。

六月二十六日 終日曇る。

六月二十七日 朝曇、五ツ半頃晴る。

六月二十八日 朝曇、五ツ半過より晴る。

六月二十九日 晴天。

七月朔日 晴天。門谷清治帰る。

以廻状申達候。然者、屋舗相对替願之通

去月二十七日被仰付候に付、下店御成造拝領屋敷へ今二十八日引移し候。此段之達、以廻状無滞早々順達留より御返可有之候。以上。

六月二十八日

渋江新之助

七月二日 曇又晴。

七月三日 晴天、午中前後曇る。八ツ半後より大雨。

七月四日 晴天、下河辺に對数表を渡す。

七月五日 曇天、八ツ半後微雨、雷。

七月六日 朝曇、五ツ後より雨、雨止て曇天。

七月七日 晴、又曇る。

七月八日 朝より晴天。

七月九日 晴曇、午中曇る。浅草へ行く。

七月十日 同断。

七月十一日 曇天、小雨、宵晴、深更雨。

七月十二日 朝より曇天。

七月十三日 晴曇。

七月十四日 朝五ツ半迄曇る。朝より暮迄晴天。夜曇る。

七月十五日 朝より晴天。

七月十六日 曇天。浅草へ行く。

七月十七日 朝より午前曇、午中より晴又曇。

七月十八日 青木勝次郎来る。

七月十九日 朝より晴天。

七月二十日 朝より晴天。夜高橋測る。青木

海三分の図□□。

七月二十日 朝より晴天。夜下河辺測る。沿

七月二日 朝より曇天。此朝青木来る。

七月三日 同断。雷雨。朝後大雨。

七月四日 同断。雷雨。午後より大雨。

七月五日 白曇天。

七月六日 白曇。久保木氏(12)出府着。

七月七日 晴天。

七月八日 白曇。青木回る。

七月九日 晴天。南風。

八月朔日 晴天、夜晴て風あり。此日七ツ前高橋氏来る。夜に入て帰る。

八月二日 宵より風大曇。四ツ後より天氣に成る。風もなざる。夜は曇る。

八月三日 朝より曇天。久保木地図初め。

八月四日 曇、晴。夜は曇る。

八月五日 朝より曇天。浅草へ画盤一面遣す。

八月六日 曇。八月七日 曇。

八月八日 曇。午後浅草へ行く。

八月九日 晴天。

八月十日 曇る。暮方微雨。午後桑原へ行く。

八月十一日 朝曇、四ツ後より雨。

八月十二日 大曇天。八月十三日 大曇天。

八月十四日 大曇天、七ツ後より小雨。佐原主人、三治郎来る。

八月十五日 晴天。風。八幡参社十九日に成る。

八月十六日 朝より晴天。

八月十七日 曇天。微雨。

八月十八日 曇天。微雨。

八月十九日 晴天。朝五ツ後、間五郎兵衛来

る。四ツ前会田算左衛門来る。九ツ前高橋

作左衛門、並びに坂部貞兵衛親子来る。間、

会田は五ツ後に白木屋蔵店棧敷へ遣す。青

木、下河辺、門倉なども同伴。九ツ頃より

高橋氏、我等、同棧敷へ罷越、一番練もの

より七番迄一覽。八ツ半頃一同帰る。此

午前往来過分に付、永代橋崩れて大勢もの

の横倒しに及べり。

八月二十日 曇天。微雨。七ツ頃大野弥三郎

半円方位盤と羅鍼持参。

八月二十一日 小雨。

八月二十二日 白曇、時々晴。

八月二十三日 小雨。桑原氏へ行く。三治郎同

道。

八月二十四日 同断。佐藤甚右衛門来る。十九

日にも来る。

八月二十五日 曇天。小雨。

八月二十六日 曇天。三郎右衛門、三治郎を連

れ津田御屋敷へ行く。

八月二十七日 晴天。三治郎を連れ、浅草厩局

へ行く。

八月二十八日 曇晴。午中見る。夜晴曇。

八月二十九日 曇天。三治郎帰国。

九月朔日 朝より雨。九月二日 曇天。

九月三日 晴天。尾形退去。

九月四日 晴天。門倉他行。此夜坂部、青木

止宿。彗星を測る。

九月五日 朝より晴天。門倉他行。

九月六日 曇天。暮に雨。

九月七日 曇天。午前より雨。午後より門倉

他行止宿。

九月八日 曇天。小雨。八ツ頃より天気。夜

測る。門倉氏夜帰る。

九月九日 曇天。残らず休み。暮より雨。

以廻状申達候。然者、佐藤修理殿義、今七

日甲府勤旨支配被仰付候に付き、明き組の

内月番支配衆牧野若狭守殿引請に相成候。

一、諸届の儀、何事不寄、明き組の内も例

の通届書式通共自宅へ可被差出候。尤、諸

届け速不申様可被致候。且亦、修理殿跡御

役定与道々可被仰付義者存候間、御自分方

明細書、屋敷書付早々認置候様可被致候。

廻状無違滞早々順達留りより可被相返候。

以上。九月七日

（十九人名前） 渋江新之助

猶々来る十四日逢対自宅へ例の通御越可有

之候。以上。

深川南松代町代地家主多右衛門店本間半右

衛門より来る。黛謙治郎方へ遣す。速刻付

旨翌朝遣す。麻生永松町家主市左衛門店門

倉と伊兵衛朝より出る。

九月十日 曇天。未明麻生迄廻状遣す。此日

より柴山伝左衛門出る。

九月十一日 曇天。門倉、八ツ後に帰る。

九月十二日 曇天。

九月十三日 朝曇晴、坂部参らず。門倉外出。

九月十四日 曇天。門倉昼後より出る。

九月十五日 朝小晴。昼後より曇る。門倉病

氣。八ツ後お琴着。

九月十六日 朝曇、夜前より雨、八ツ後止む。

門倉他行。

九月十七日 朝曇。お琴亀嶋へ行く。四ツ頃

より雨風。門倉帰らず。

九月十八日 朝より晴天。内弟子御手当金浅

草迄下る。門倉帰らず。

九月十九日 同じ。九月二十日 同じ。

九月二十一日 晴天。

九月二十二日 晴天。竜ヶ崎松田丈右衛門来る。

四ツ後廻状来る。

以廻状申達候。然者、今二十日佐藤修理殿

跡御役根来喜内殿被仰付候間、御自分方為

御願明細書、屋敷書付、根来喜内殿宅へ早々

持参可被致候。尤、服紗小袖麻上下着用に

て可被相越候。病氣差合等には御名代

来二四日迄に明細書、屋敷書付可差出候。

一、御自分方諸書物、修理殿へ被差出候。

振合の通認、来月六日迄に可被差出候。右

廻状御刻付早々順達留りより可被相返候。

以上。八月二〇日 渋江新之助

根来喜内殿宿处、本所石原。九月二三日未

明、浅草新旅籠町家主藤七店高橋政蔵へ届

る。

九月二十三日 曇天。

緊急速報

十一月一日に放映されたNHK総合テレビの「その時歴史が動いたー伊能忠敬」のリポートを大阪放送局のデレクタからいただきましたので御紹介します。視聴率一一、四%でいい成績でした。

放送をみて寄せられたメッセージは八〇通程度でしたが、意外なことに三〇通が男性で、五〇通が女性でした。女性は三〇代、四〇代の方が目立ち、男性は六〇代、以上の方が多かった様です。頑張れ、男性諸君、伊能忠敬は男性の世界の人物ですぞ。

主な反響はつぎのようなものでした。◎は多かったものです。

- ◎ 地球の大きさを測るためのものであったことは知らなかった。
- ◎ 小さい頃からの星の興味を生かした事に感激した。
- ◎ ゲストの「造酒業を過不足なくこなした事がその後の人生に生きた」という話に納得。
- ◎ 二つの墓に伊能の人柄がしのばれた。師匠とともに眠る墓。人としてすばらしい。訪問したい。
- ◎ この偉業を五六歳から始めたとは！もつと知識が有ったのかと思っていたので驚いた。
- ◎ 奥さんはどうだったか知りたかった。
- ・ 海岸沿いの測量の様子から二〇〇年前の作業風景が想像できた。
- ・ 健脚は脅威。自分は伊能ウォークも参加する勇氣がなかった。
- ・ 夢は持ち続けてこそ実現するんだと聞いたことがあるが再び納得。
- ・ 測量のやり方が詳しく説明されており、どうして、どの様なやり方で、と自分が疑問に思う事は全て答えがあった。
- ・ 年を取ればとるほど、やる気がなくなるが目が覚めた。

- ・ リポーターが島を測っている映像は大変さが伝わって良かった。
- ・ 高校生の頃、難しい名前前の日本地図を作ったと二行書いてあり、どうやって作ったかと一秒ぐらい思ったが、とにかく授業が進むので忘れてしまった。
- ・ 喜んでいたと言う最後の墓の所で、苦しんで測っていたのではないという事がわかり嬉しかった。
- ・ 只の測量士だと思っていた。
- ・ チームで成し遂げる、自分の手柄としないと言う考えは、政治家にも見習って欲しい。
- ・ 地図を作った人という以外何もしなかった。
- ・ ぴかーは原寸大の地図。
- ・ 自身の地図に対する思いを綴った文章があったらよいなと思いましたが。
- ・ 伊能ウォークをテレビでみて、参加しようと思いつつ、実現しなかった。今日は自分も参加している気分。
- ・ 具体的にどうすばらしいのか、当時の世界の地図がどうなのかも知りたかった。
- ・ 某新聞社主催の伊能ウォークが一ヶ所挿入されていて、放送の公平さを感じた。
- ・ 伊能のキャラはびつたりだった。おじいさんというより、青年としてみた。
- ・ 星が関係したとは知らなかった。東京博物館の展示会で先に知っていれば見ていたのに。
- ・ 雨の日はどうしたのだろうか。
- ・ 日本のレオナルドダビンチ。ダビンチの天才性のかわりに忠敬には心があつた。

(編集部)

お知らせ等

一、九州伊能忠敬展が終了しました。担当幹事として、大変な御尽力をいただいた九州の古賀方子さん、ありがとうございます。厚く御礼を申し上げます。

九八年に開かれた江戸東京博物館の「伊能忠敬展」と較べると予算は遥かに少ないのですが、内容は半分以上上だったと思っています。主催していただいた北九州市立歴史博物館、朝日新聞社西部本社ならびに出展の伊能忠敬記念館、伊能家、東京国立博物館、藤岡家、徳島大学、松浦史料博物館、豊津高等学校など関係者のご努力に対し心から御礼を申し上げます。

古賀さんは、伊能忠敬研究会の九州展担当幹事として「九州伊能忠敬展」事務局の構成員でしたが、残務整理終了とともに解嘱となります。

二、新たに北九州市小倉の常盤橋近くに忠敬の測量記念碑を作ろうという話が出ております。忠敬は第一次九州測量のとき、下関から船で小倉に上陸しました。常盤橋近くに第一の杭を打って九州測量の基点としています。その地点を画定し、記念として小倉地区の第0番の一級基準点に設定しようという案です。

第一番は、すでにあるから、0番というわけですが、測量の基準となる一級基準点ということは、生きて使われる記念碑になるわけで画期的なモニメントといえるでしょう。

北九州の測量会社社長で会員の熊谷要平氏の発案ですが、設置と用地の内諾を得て募金の運びとなりました。会員の村井純孝さんが北九州測量協会名誉会長として実行委員長、熊谷要平さんが事務局長に就任予定です。本会も参加することになりました。

三、事務局幹事、編集幹事の委嘱

事務局で定期的にお手伝い頂いている加藤さん（総務担当）、山本さん（かわら版編集）、坂本さん（入力および資料室ホームページ担当）の三氏を事務局幹事に委嘱します。

また、これまでも編集の作業に御協力いただいている岡部孝子さんに、改めて編集幹事を委嘱します。

原稿提出方法についてお願い

まず、原稿はなるべくパソコン出力による入稿とし、ウインドウズのテキスト・ファイルを添付していただくようお願いいたします。ワープロの場合も必ずフロッピーを添付していただくようお願いいたします。ワープロの場合は、外注して変換しなければなりません。なるべく、パソコンのウインドウズでお願いします。インターネットによる入稿は大歓迎です。メールアドレスは次ぎのとおりです。添付ファイルで入稿してください。ただし、出力原稿を郵送またはFAXして下さいようお願いいたします。 watainoh@es.ijfu.or.jp

校正は、著者において出力原稿とデータ間の校正を完全におこなって下さい。編集部では配列形式の確認はしますが、文字校正は原則としておこないません。また、後述のボランテア入力採用にともない、著者校正は原則として廃止します。と申しまでも、パソコンが御無理な方は無理をしなくて結構です。できましたらというお願いです。

つぎに、ウインドウズのワードバージョンをお持ちの方で、入力に御協力いただける方を募集します。手書き原稿分を事務局よりFAXでお送りし、FDまたはインターネットでフォーマットをお送りしますので、上書きをいただければ結構です。タイトル、ヘッダなどの形式整理は編集部でおこないます。

（編集部）

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 年三回以上、交流誌 年三回以上

②発表会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

千一六二 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁です。越える場合は分載または、間隔をおいて掲載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。原稿の状況はお問い合わせにお答えします。

一頁は二段組31字×26行、二段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは二つあります。一般情報は大友常任理事の担当です。URLはつぎのとおりです。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報については、「伊能忠敬研究会資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなどが御覧いただけます。もちろん両者はリンクしています。

編集担当

本誌の編集は、つぎの編集委員ならびに編集幹事が担当してまいります。芳賀啓(柏書房社長)、安藤由紀子(元国会図書館勤務)、伊能陽子(伊能洋氏夫人)、岡部孝子、渡辺一郎(代表理事)

編集後記

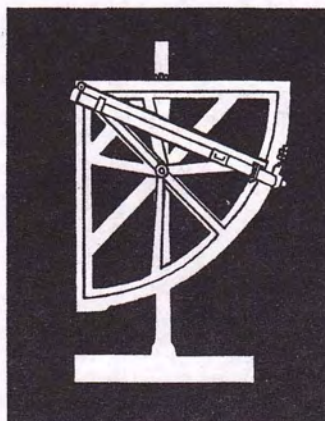
本号から、経費を節減して、発行回数、発行頁数の増加をはかり、併せてイベント等その他経費捻出のため、入力と版下制作を会員のボランティア協力でおこなうことにしました。ちなみに、現在は発表誌一回の発行に約三〇万円がかかっており、会費の殆どが会報代となっています。製版方法の改善で、費用は二分の一以下となる見込みです。御協力をお願いします。

パソコンが便利になって、このような版下が楽にできるようになりました。一〇万円のパソコンで、ワープロ機能は完備しホームページを覗き、メールを送ることができます。考えようによつては、これほど安いものはありません。ワープロは早晩消えるでしょう。パソコンをやらない場合の情報格差が広がります。無駄口でご免なさい。(渡)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.24 2000



ESSEYS

NHK [New year' s Historical Play]

40,000,000 steps Walker INOH Tadataka

Letter from Mr. SAKABE Tebei

WATANABE Ichiro 1

Ioh Yoko 12

MATERIALS

Survey of INOH along the Bo-So coast (2)

Reading Document in Sawara 6

Letter of EGAWA and Surveying in IZU (3)

WATANABE Takao 6

KOJIMA Kazuhito 15

NAKADA Masayuki 20

STUDY NOTE

Pictures of Survey at Ezo area

ASAI Kyoko 25

REPORT

Kyusyu INOH TADATAKA Exhibition conclude

Diary of INOH in Edo (4)

26

SAKUMA Tatsuo 27

OTHENEWS

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY